ポケットモンスター　オーレから始まる旅

ツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　オーレから始まる旅

【Ｎコード】
Ｎ９５０２Ｑ

【作者名】
ツリー

【あらすじ】
どうして・・・
まだ終わってはいなかった。
オーレ地方に出現したダークポケモン。
それがオーレの外にも出現した。
新たな旅に出ようとしたリュウトの出会い、別れ、そして再び始まるスナッチ。
その背後にあるものとは？

（今までの作品に出てきたキャラも出てきます）

出発

「いよいよか・・・」

ここは砂漠の中に作られたオーレ地方のポケモン総合研究所の一室。そして僕の名はリュウト。

1年前、この地方で起きたダークポケモン事件を解決した事がある。この事件は状況が少し異なるものの、似たような事件が当時の5年前、つまり今から6年ほど前に起こった。その事件を解決したのは元スナッチ団のメンバーでありながらそこからスナッチマシンを奪い取り組織を裏切ったレオという青年だった。

ダークポケモンを陰で操っていたのはシャドーという組織。しかもそのボスは同じくオーレ地方にある砂漠が多いこの地域では珍しいオアシスの様な水の多いフェナスシティという町の市長だったのだ。

そして一方、僕が関わった事件にもシャドーが関わっていたがこれは6年前とは少し状況が違った。首謀者は常に傍にアルドスとエルデスというボディーガード（実は二人とも息子）をつけていたメチャリッチという大富豪という表の顔で正体を隠していたデスゴルドだった。

6年前と1年前。共通点は多々あるが、決定的な違いがある。それは組織内でコードネームXD001と呼ばれていたダークルギアの存在だ。

XDとは「eXter Darkpokemon」の略で、絶対にリライブ不可能とされて作られていた存在だ。リライブとはダーク

ポケモンを通常の状態に戻す事である。ダークポケモンは心を閉ざし、専用のダーク技を使用する。だが姿自体は本来変わる事はない。

それに対して本物のルギアが白なのに対して、体は全体的に黒。目が鋭くなっていたり、爪が鍵爪状になっている等、本来の姿とは違うものであった。

その後、少々特殊な方法でダークルギアをリライブする事に成功した。そしてシャドーに利用されていたポケモンは本来の送り場所である施設に送ったのだが、後日お礼として一部を受け取って欲しいと連絡があった。最初は断ろうとしたが、所長やマナから遠慮しないようにと言われ（マナは自分の新しい遊び相手が欲しいのだろうが）トゲピー、ボーマンダ、ジュゴン（当時はパウワウだったが進化した）等、１部を譲り受けた。因みに奪い返した中にフリーザー、サンダー、ファイヤーもいたのだがこちらも譲り受ける事になった。そしてルギアだがこれは所長から僕が持っている様にと言われた。

その後、僕は外に行ってみたくなった。思い切って所長やリリアさんに相談してみるとスンナリ了承してくれた。

少々ポロローグが長くなったが、今日。漸くその日が来たのだ。手持ちにシャワーズ、ブースター、サンダース、エーフィー、ブラッキー、そして・・・隠し駒にルギア。始めてもらったイーブイからタマゴを産ませて各々進化させたのだ。

「おはようございます、所長。リリアさん」

「おはようリュウト君」

「おはようリュウト。いよいよ行くのね」

「うん」

「お兄ちゃ～ん！！」

と元気な声で僕を呼んだのは妹のマナ。ちょっと生意気で無茶無謀をしょっちゅうしでかして僕ヤリリアさんをハラハラさせるが、いつも元気で皆の和ませ役だ。

「お兄ちゃん、本当に行っちゃうんだね・・・」

「おいおい、寂しいのか～？」

「さ、寂しくなんかないもん！寂しくなんか・・・・・ウ、ウエェェェェェェェェェェェン！！！」

と、泣きだして僕に抱きついてしまった。

「マナ。お兄ちゃんを悲しませてはダメよ」

「だって、だって・・・これから暫く会えなくなっちゃうんでしょ？お兄ちゃんと離れ離れになるのは嫌だよ～（泣）」

僕はそっとマナの頭を撫でた。

「マナは心配さんだな～。大丈夫だよ。途中でマナにも連絡は入れるさ」

「・・・・・本当？」

「あぁ」

「・・・・・約束だからね。ちゃんと連絡しなかったらマナ怒っちゃうから」

「約束する」

「リュウト、P☆DAは持ったかい？」

「うん。でもこれから行くとこって皆端末とか違うんでしょ？ジョウトだったらポケギアだし、ホウエンだったらポケナビだし。連絡とかは大丈夫かな？」

「それは心配要らない。僕が機能を追加しておいたから大丈夫さ」

「ならいいんだけどね」

「みんなは？」

「連れてる」

「まずは何処に行くのお兄ちゃん？」

「最初はイッシュに行く。このオーレから1番近いからね」

「アイオポートからの舟の出航時間は今から行って丁度いい位ね」

「うん」

「あぁ、そうだ。２つ言い忘れてた」

「何です、所長」

「まず１つ目。各地方に行ったら必ず最初にそこの博士に挨拶に行く事」

「今からリュウトが行くイッシュ地方だと・・・アララギ博士ね」

「そう。そして２つ目、アイオポートに着いたらリュウトの知り合いが待っている筈だから一緒に行くようにしてくれ」

「お兄ちゃんの知り合い！？まさかお兄ちゃん、彼女でもできていたの！？」

「どうしてそっち方向に話が行くんだよ。というより今の今まで一緒に行くなんて聞いていないし。一体誰なんですか？」

「それは行ってのお楽しみさ（それにまたアレを使う事にもなるかもしれないし・・・）」

「何か言いました？」

「いやいや、何でもないよ」

「・・・じゃあ行ってきます」

「いってらっしゃい」

「お兄ちゃん・・・いってらっしゃい！！」

「プララ！！」

「マイ！！」

研究所を出ようとした時、プラスルとマイナンが肩に飛び乗ってきた。

「アハハ、その子もリュウトと一緒に行きたいようだね」

「う～ん、連れていきたいのはやまやまですけど、僕は手持ちが一杯ですからね」

「じゃあ使う時になったら私に連絡してちょうだい。私がパソコンに入れて準備しておくから」

「お願いします」

「さぁ、そろそろ時間だ。リュウト、君の新しい一歩が始まるんだ」

そう、こうして僕の旅は始まった。

出発（後書き）

因みに・・・

P☆DAとは、「Pokemon Desital Asistant」の略です。

フェリー内にて

アイオポートの港。ここには少し面白い仕掛けがある。橋が二方向の矢印のスイッチを押す事によって動くのである。

港町というだけあって様々な大きさの船が停泊している。その中の真ん中にある少し大きめの白いフェリー。それが僕が乗る船だ。そこへ・・・

「お～い、リュウト～」

と僕を呼ぶ声がした。

「・・・君は！」

声の主はクロ。六年前、シャドーと戦っていたレオを「コドモネットワーク」という小さな情報施設でバックアップし、一年前もＯＮＢＳというテレビ局の情報処理能力で僕をバックアップしてくれたメンバーの一人だ。

「やぁ、お久し振りだね」

「まぁね。それよりどうしたのこんな所で」

「アレ、所長さんから聞いていないのかい？リュウトがイッシュに行くから一緒に行く事になって」

「所長が言ってた知り合いって、君の事だったのか」

「そっ。僕達のＯＮＢＳをもっと多くの人々に知ってもらうために行動派の僕が派遣される事になったんだ。ホントはレンが直々に行きたかったらしいけれど、立場上中々自由行動が出来ないからねぇ」

「確かにレンはいつも大変そうだからね」

「とりあえずヒウンシティのすれ違い調査隊本部っていう所に行く事になっているんだ」

「じゃあ船が付いたらホントにすぐなんだね。僕はとりあえずアララギ博士の所へ挨拶に行くつもりだよ」

その時、

ボ～～～～～～～～！！！！！

「間も無くロイヤルイッシュ号が出発いたします。ご搭乗されるお客様はお早めにお願いいたします」

とアナウンスが入った。

「ヤバッ！急がないと」

二人は船に向かって走った。

船内の割り振られた部屋にてー

「それにしてもよくタイミングがあったね。僕がイッシュに行く時期と、クロがＯＮＢＳの代表として行く時期が」

「偶々所長さんと会う機会があってさ、リュウトが旅をしたいっていうから日程を調整しておいたんだよ」

「それは悪い事をしたね」

「いや、気にしなくてもいいよ。それにリュウトにも無関係っていう訳じゃないし・・・」

「へっ？今、何て？」

「・・・イッシュについてからにしようと思ったけど、やっぱり今話しておくよ。今回僕が外に行く理由の一つには君も関わっている事なんだ」

「それってどういう事？」

「口で説明するより預かったものを渡した方が手っ取り早いかな・・・」

クロは自分の鞄から何かを取り出した。

「・・・！？これは・・・・！！」

リュウトが忘れる筈もなかった。何故ならクロが取り出した物は一年前にリュウト自身が使っていたオーラーサーチャーとスナッチマシンだっただからだ。

「どうしてクロがこれを・・・」

「・・・もう予想が出来ているとは思いますが、実はイッシュのネット友達が様子が変なポケモンを見たっていう情報をこっちによせて来たんですよ。それで所長さんに事情を話してこれを預かってきたんです」

「なんだ・・・折角旅が出来ると思ったのにまたスナッチをしないといけないのか・・・これ結構罪悪感あるんだよ？いくらダークポケモンとはいえ、人のポケモンを奪うというのは」

「まぁ、分からなくもないけどね」

「・・・今となってはそのうわさがデマだったという事を祈るだけさ」

オーレとイッシュはそれほど離れているわけではない。フェリーで約一時間半。部屋でゆっくりと過ごした。

港が近付くとキャモメやペリッパーの鳴き声が聞こえた。

「ふぅん、ここがイッシュ地方か。随分とビルが多いみたいだけど」

「ヒウンシティは確かに建物が多いけどシッポウシティには博物館があったりして、街全体がアートの街らしいですよ」

「そうなんだ」

「・・・とりあえずここでお別れだね」

「そうだね。僕はこれからカノコタウンに行くから」

「うん。何か分かったり耳寄りな情報があったらリュウトにも教えてあげるよ」

「それは助かるな」

「・・・じゃあ、ちょっと名残惜しいけどそれぞれの道を行こうか」

「そうだね。またね、クロ」

「またな、リュウト」

クロと別れ、僕は一人で見知らぬ地方の第一歩を踏み出した。

出現ダークポケモン

ポケモンセンターに入ってパソコンからイッシュのタウンマップをダウンロードする。端末が異なるので対応できるか心配だったが、ケーブルを使って何とかする事が出来た。

ついでに自分のボックスを起動してシャワーズをボックスに戻し、代わりにボーマンダを手持ちに加える。

というより、センターの中にいる人達の視線が微妙に痛い。確かに僕みたいな恰好をしているのは珍しいのかもしれないが。

タウンマップでカノコタウンの場所を確認する。

「すぐに行ってもいいんだけど・・・ちょっとばかしトレーナーのバトルでも見てみるか」

ヒウンシティには一箇所に集まる様に作られた通路があり、噴水が目印だ。そこではグループを組んでヒップホップダンスをするものもいれば、つるんでポケモン勝負をしているものもいる。

「おっ、やってるやってる」

「ヒヤップ、水鉄砲！」

「ヒャ～！」

ちょうどヒヤップの水鉄砲が相手のダルマッカにヒットし戦闘不能となった所だった。

「どうだ！」

「ふん、まだまだ。いけっ、マラカッチ！」

「マ～！」

次に出てきたのはサボテンの様な外見でマラカスの様な音を出すマラカッチだった。当然、外見からも分かる様に草タイプである。

ここまでなら何にも問題はなかった。しかし・・・

ピーピーピー！と僕のオーラサーチャーが反応していた。

（まさか・・・！？）

出来る事なら信じたくなかった。が、そんな脆い願望は容赦なく打ち砕かれた。

フィルムが展開し、再びマラカッチを見ると・・・

ダークポケモンの証である紫と黒が合わさった様なオーラが噴き出ていた。

久し振りのスナッチ

「いけっ！マラカッチ！」

「マ～！」

周辺で見ている人からすれば唯の体当たりに見えるかもしれない。

だが、オーラサーチャーを持っているリュウトには全く別の技の様に見えていた。

ダークアタック。かつてリュウトが戦ったシャドーが使ったダークポケモンが使うダーク技の一つだった。

ダークポケモンでない通常のポケモンにはタイプを問わず効果抜群となる。

ダークアタックをモロに受け、戦闘不能となったヒヤッキー。

「くそう、俺の負けか！」

「よっし、これで9連勝！あと1回勝てれば・・・ん？おいそこのお前、俺と勝負しないか？」

よりにもよって向こうから勝負を申し込まれた。コレは好都合である。

「いいよ。とはいえ、勝負には万全を期したい。一旦回復させてからでどうです？」

「ふん」

ポケモンセンターで、回復して広場に戻った二人。

「お前を倒せば１０連勝だぜ」

「僕はそう簡単に倒せませんよ」

「へっ、言ってろ。行け、ダルマッカ！」

「ダ〜！」

「だったら僕は・・・ゴ〜、エーフィー！」

「エーフィー！」

「ダルマッカ！ひのこ！」

「その程度なんてお笑いだな。エーフィー、かわしてサイケ光線！」

「フィ〜！」

エーフィーのサイケ光線をくらって戦闘不能になるダルマッカ。

「チッ、やっぱコイツは使えねぇな」

そう言いながらダルマッカをボールに戻す。

「まっ、俺の本命はこいつだからなぁ。いけっ！マラカッチ！」

「マ～！」

先程と同じようにオーラーサーチャーが反応し、薄いフィルター越しにマラカッチから黒紫色のオーラが噴き出ていた。

「やっぱりダークポケモンか・・・」

「マラカッチ！ミサイルばり！」

虫タイプの技はエスパータイプには効果抜群・・・のはずだが、

「な、何故だ。何故あんまりダメージを受けていないんだ！？」

「理由を教えてやろうか？エーフィーにタンガのみを持たせておいたんだよ」

タンガのみ。持たせると虫タイプの攻撃を受けた時、一度だけ威力を弱める効力を持つ。

「くっ、ならマラカッチ、ギガドレインだ！」

「チ～！」

「エーフィー、それに耐えてからスピードスターだ！」

「フィ～！」

「くっ、負けるな。マラカッチ！」

「マ〜！」

「（やっぱりそうか）」

先程のバトルでも気になっていたが、相手はダーク技を使わせる時のみその技の名を言わなかった。知らないのか、はたまた知られたくないのか。

「エーフィー、影分身から電光石火！」

「フ〜！」

影分身により相手を惑わせ、油断したところで背後から電光石火をきめる。

「チ〜！！！」

「マラカッチ！」

「さて、そろそろお終いにしようか」

そう言うとリュウトは空のモンスターボールを一つ取り出す。

「おいおい、お前バカじゃねぇの。人のポケモンはゲットする事は出来ねぇんだぞ」

「と、思うでしょ？ところができちゃうんだなぁ・・・コイツを使えばさ！いけっ、スナッチボール！」

左手のスナッチマシーンからモンスターボールに特殊なエネルギーを送り、それをマラカッチに向かって投げた。

掴みとる様な幻影が見えたかと思った次の瞬間、マラカッチはスナッチボールの中にいた。

「スナッチ、完了」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9502q/

ポケットモンスター　オーレから始まる旅

2011年10月7日02時32分発行